



梅花園先生撰

題類

士朗叟發白集

製本所

A765
1
1-1X

静觀堂

愛知縣有物品

北山の愚心公、切に列
子の寓言を、
中々、
今梅花園主
朱村史生、
乃、
世

愛知県文化センター
昭 57.5.17 和
291983

所のよきと學ぶ人の
即ち毎日を一日と夜ふ日ふ
もと免て情にあやの思
月日の隔るに如く
入江しも限あられど

夜竹の汲も流し
種くしのほのたふふへ
とくそとふに様
のたふふの進む造化
の神のまもかたふり也

實撰者と云ふ

と云つ

乙
四
繩

五
道

松和園白集母を廣きりて
のち不援編の何れに
事なきを深し深きこと
使は徳口平く高くして
風調紙暮ふ人をく
實の昔蕉翁より一大家
初心に鑑むるを

清きと句集を精探の意候
あやまらば句數多ふ所調發
學ぶに其題を滑るゝふふ
されく多しと云し士朗叟
一世の句をあつて四時と雜を
わらふの初學に及ぶに極
かゝるたの類題して書名も

あやまらば句集を精探の意候
あやまらば句數多ふ所調發
學ぶに其題を滑るゝふふ
されく多しと云し士朗叟
一世の句をあつて四時と雜を
わらふの初學に及ぶに極
かゝるたの類題して書名も

二十二萬言也 初平深う存
机より筆を引く 松竹を
清く 師徳を信じて斗る

文政乙酉秋

梅花園梅間記

凡例

之景書れ共きハモウキク士朗史文集に
載け

神將名所と云一先部と云千向と云
繪をとり少くあり藝田如踏歌まう梅の梅に
向ふわくをまきく一まう梅一

史に吟詠千とて善く一いれとてく
乃ともあらん杜撰より所へ所へ
くわくあつち小書とあつれをまはる

此編よりとす伏聞揚ハ度毎子書とて
後乃編つてかゝるといふ
他邦よをおせられたる白木は謀す水と
あつたは裁まき水とていふ一書はハ
毎くすきまけをいふ也
流り変化と此道の考なりハ年序成
安し應うとしかの年月とていふぬも
あとは来々くせずと人素く珍

類歌士朗叟教句集卷上

春之部

葉旦

何事も分つてまゝのあつた

年賀

正月

とつてむやみくす年の次へ
灯は見えぬ戸も正月に宵寐が

元の雪れつる

元日

入りの年乃却てよ雪れ去

菖菴

焼つくーくそをまか乃其

月雲やなりぬそ花れ其

元日子日

松はさしあつやけ色と花の其

よれそふの其あ花乃春

二日

月雲はあめ年の二日か

其も二日さるる松

松はけやきの六初りあ八月

筑前山森のさと秋枝氏需

直して菖菴子とくをり

菖菴子初の糸も香子白ひり梅の白

松の内菖菴戸や立初見えは雲れ内

菖菴わつか梅は梅唱ととろくう年

あつむ菖菴を人れりいふ

菖菴子れり菖菴れ畑造

策雲居解歩

そはともあつて菖菴を摘よる

菖菴乃初もろくぬりうな

菱草

我ま白々しき花をくさし
りくさしや又も色くさる菴の鍵

古井を分房くさす

梅

芳若のや横に柳しつ松のけ
くさしきも咲らん月と梅
梅くさや唯あつましきか
梅の月とくさし居るは雪月根
梅はまき門や其角れくし

契田社踏歌

花は梅は柳は
梅はまぬきもさくさくや小盆
子代倉まで梅の姿をねく

梅はくも常りくも 泪く郎

曉臺奥初七

う光柳りくさくさき夕くお
世よりきき白ひのくさくさや月と梅
俳諧のくさくさ木よりくさくさめを
を咲て梅をくさくさぬ日ハなうりくさ

望しゆくや年子すきあるくはのそ
梢もふ咲く梅乃花ひとり
芭蕉翁肖像眼

胎も鼻もひらく梅の花
菅公十年忌龜尾天満宮

影家法楽

玉漏る言やあそびし梅の香
梅花意梅久歌

春宵一刻值千金

二七

夕色初ら門つゝを春よ月と梅
山高く水長し梅とらうく

浮山な月らうあそび梅乃花
紅の上や二人しと梅妻のむ

五十々山の麓六十八山は半腹
老の山崎大飯うらあそとそらく

とあつていそそ梅と梅也
山よ古き事あり梅の下傳ひ

梅お園の梅見ハ二月ニそらく

二七

あやうし 自ら来て予を為す
投しりれい

子新来く是せざるを梅は心多し
月宮ハ梅子二月乃あらし
梅、多やつこ大州の柔れ本畑
ゆくくと棹をゆく梅花園の
梅は関と漕すれハ放るる小艇
うねりてあふのこく 軽なりぬあ
おりの舟也海は紅白は梅や

あやうし 海のうねりや

わが海はわがこ舟とつる梅の花
子のやうに梅子れい梅乃花
九岳亭

梅の香や露の中まを掃らきり

方々葉落ふ喜ぶ心は院籠

湖上は甚し

様、多やあまの薪を志賀の山

梅花園

柳

ワ、若くは古の生家系柳見か
御嶽のまゝまゝの柳うな
猪川の猪うまのふ柳うな
青柳まゝまゝの垢まゝまゝ
青柳やまゝまゝの垢まゝまゝ
伊勢まゝまゝ

青柳乃乃や少家のひらり口
柳もやまゝ一袋まゝまゝ毎
花柳まゝまゝ柳まゝまゝ毎

矢矧

青柳のまゝまゝのハ万里の柳
柳まゝまゝまゝまゝまゝ

青柳岩

青柳のまゝ根くまゝまゝ白
一おう川坂まゝまゝの柳まゝまゝ
岩まゝまゝまゝまゝまゝ
ゆまゝまゝまゝまゝまゝ
岩まゝまゝまゝまゝまゝ

鶯

上
七

ほろろと啼き管草一草の如
里婦を〜管をき木のるが
題管水筒

管よる〜い啼くハ水一斗
叶君を最管れ名な〜し
〜い其の宿ハちのきき月夜
管乃 柳ノ啼ハや三ツれ月
管々わ〜も鳴る〜月と柳
水の小庭を管のま〜りと

庭掃男乃管より〜ハ

鶯と〜もな柳ノ根〜して
管子 清流乃水ありなり
〜と〜と〜管啼ぬ壺の月
々や啼〜ん管見〜る根れ内
箱根山

管れ疎〜り〜〜二の音が
啼〜〜〜管外〜り〜り
管〜〜〜は浮世を竹の中〜

管のうらやまよりの二夜三夜

我店ハむしー管西月夜

くめ柳け一里を接ぐ卯

喜風や猶子あてくる杉の立

平月ナニイ伊勢道子入ニ事

柳子おれ神ふとるる

喜風やむしー踊乃柳子成

ゆもむんあまも世もむん喜の風

雁鴨のつくや館をれ畑この

館を

白奥

美松

産

白奥のありとははんてく松のけ

くつくーきぬ子小松のむしー

舟人れいらまーより軽うむし

朝露貝の卯凍まこりあふ分

とーうれおくりくとりあうお

古き乃きりんむらぬあさ産

ハきうむし産の板橋流ーより

蕪古や海士れあけろ涅槃像

是やうりもー死ねハ佛か

涅槃

るは明く雛子のうしろぬ細か
深草や雛子れりけし人の家

大森山中

うらあゝまゝ〜雪れき〜まゝくぬ
雛子顔白〜あつ〜や鳴鳥
横雪や塘のうきはき〜花
湯杖よ少きおき新れ乙女哉
乙女乃蝶〜もな〜ぬ山と〜那
塩木つむ中と並れ澄来ぶ

燕

帰雁

雨を〜つま〜並ぬ根ぶ
帰〜〜居〜芦乃ニ葉か

西湖

今一度望田よち上帰〜居
雲霞又海雁となりよ〜別
梅柳〜心やのこ〜人
の〜ハ夜を鳴り〜の〜
蝶を〜〜果〜春の居

春雁

雲雀

〜〜毎〜同〜〜揚雀

上
下
六

雀

父母れありとを竹の啼雀

啼きくもむねを啼り蝶をま

小所讀

蝶鳥

蛙

つゝもれ種美人の村あかり

浮しつむねれきと啼く

蛙やけはひくくも乃啼

夕々水や又なきで子なき蛙

ふえく赤く水け蛙が

茅場地

陽空

つくくくもむねがうり夕々

笠寺や蛙鳴ねれ色却り路

人もぬく蛙もあつて山家

棚橋やまよく州より蛙

葉火をけはひよくと暮蛙

空破地やうりく世てり半日

陽空のまよ白くそ紙乃鼻

けうあやつふもそるしつて

陽空と淋しき物あつて

猫恋 山をり一帯はるく猫の恋
紅梅 新物よあねり猫のり葉が
寄居虫 ひれおて月もくなれや
田螺 言ふ言ふきけ八洲一き田螺が

所思

思ふをいづと誰か田一此傍住居
花もちり月も入るり田や一売
ととく千世話くぬ花を友
三月廿六日 古和歌よとまらて

初桜 五月角中ありはくぬん初らる
菊お根 葉のあそりや二まおれりさう
春草 朝之里もくろ誰をそまの葉
苗代 胸くろく活きの葉もくまれ葉
稲ま〜〜里〜〜月〜〜

はな〜〜を〜〜ハおの運き
年々ああありはくぬ花を友
出〜〜く〜〜もあそりな
関〜〜れい

菜花

菜乃花也志賀山越成より
菜れむ千大名のゆき菜の柳
柳の肥く菜の葉すのぬきめし

桂五亭

菜乃花を深めよ花れ柳衣

かくつひれも親もくわきま

けしきもりてを子花はま

よひ

ひのむよ口菊そめく亭菜

種時

柳を伊勢からをるる宵月夜
夕の月を流し種をえりてこ

家は賀切りてをるる吉人吉

善とて小顔のえおとてわ

春

よきと事とせよとてりあり家は夫

路果園中の若葉一柳移し

栽しとてあやぐりてはれ

よるよるに舞舞つらん春乃色

春

喜れぬもくくなくはよるよる

春水
喜海
喜れら乃出入ね乃一本う角
喜乃水長良へ落て形形し
住しーの喜れひぬう春の海

凡化亭詩集

春夜
喜の夜ねおとく物かうらな

醉後

喜れ夜やおとくのけし村枕
春の夜れおりの夜色ハ黒茶挽
もぬ乃おの喜しとあうく都

二月
喜のねら心れおきうらなをり紫
大まきよ喜れい西かき二月哉

更衣
きまききや入られ庭う喜
いけいけいけいけい

風巾
几巾きねく喜れおれおれ

水
屋根くさよ離れおれおれ水し

鳴き鳥
紫れ戸や寝ておれおれおれ

雲入考
鳥雲よ入然否乃つておれ

雛
雛に駕をたれうらう見くおれ

桃

まりこれお

うらふきく桃さしつり雛のお
山のもよ花れ朝ありひなのあ
まふもまきや難乃賜まりり
おあるまや桃さし門の砂さし
壽老人渡

汐干

何のその干とせは桃の一作さき
依らんやせ日らねまき桃のふ
人を活汐干ねらつ汐干だ

花

久能山の薫

汐干ともあつて西り浪間を
山寺や花よりよきすくさし

長良里

罪もむくひも花よまきつ花れ
さき枝とさしつクケ花さき
折下三石のあしつふさささ
まうふ三石比宗をあらわ
芭蕉翁のあしとさし本園

むしあつしつや多度の

山踏せんとる浪れ里ののり

樂書と久より花の孫孫うす

年三三回忌

ちかきもつとつと父よと塚のふ

花曇り晴々くハをれおひなり

向ふきをち盗人れこちなり

山里の花子孫抱むしつが

嵐山

花々々このも常さぬ嵯峨の宮

ふつと嵯峨我は持てく

淋しれとちをちむのりけ

贈亡人吳井

よき事ちいひよきおよ花乃け

眉山の花らんちとちとちの

文庫とちとち水は傷のく山お

よいら何初をち山乃やち

位をちとちとちのりけ

まひりく

蝶ももふやまけし花のうけ
池乃端くく一間くをうむの岩
赤し里や花乃名跡を鳴く鳴
そのこは唇をうむくま
蕉翁の句と自得く

色も香もなぐてま見の眼鼻か
ちとまうくとん花と見てて見むま

山寺くま

撞あもも痛くを花見の泊る

七寺

鈴の音や花見うてくれちせうと
道中といまねてあまニ夜ニ度
捨くくま世にまなうく守くく

久らまのふ所て

このりくま店や梅まさい石を
杉橋一本切きなわわくく

枇杷園花見

やうそくハ又来る年れきんくさ
みちくくまよまつね板橋か

梅花園子まろくかりのり

の池の蓮あきつとてちま

月夜の素をりんと一人

あつりお念ひく

曙や人乃さうく成本乃向う

品川や海まこくく山ま

月まこくく赤山まこくく

東叡山

我人見ても目覚たき揺る

妙義山

白雲乃名少くは有は板

相原牧

駒れあつちとちりも山ま

あつれ土に残くち土ま

跡くちまねくちいり重

幸因まねくち幸海の神宮

語の

院塔の……のさう……
老々才れ意なり……山さう
おら……

虎足莽

つ……身て居ぬ……
ち……ハ又……
世の中……西上人乃
……朝……

山堂

……一帖……

……舎れ……
……れ……
山……
久……
心……

山……
や……
得……

建つとよらこひ

躑躅
菖

本瓜つゝ一廿二のりきき為が
こゝろあつてまひこころはなりのま

遊福壽山

おのつまに藤れむ咲野相が
雲霧あめくくくはるくはれは
藤魚れけり一れききき

菖のまおくくくあつてあう那

初春

雪の松より雪けとも喜かり

けきとありはむ林のなけり

初春や雪れふきり沙る山

りあはきは梅のまゆもあつて

けまもけり何やう 梅乃そ

本居丈人跡生のゆらいでた

園へ帰らうとまひ

初春の松も雪れふきりなれ

あさくくまひまひまひの門

惜矣
善哉
春殘

むく乃 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻
まよひと水とくあす千曲川
塙鳥城千ふりくく善哉善哉
あつあつとくあつあつとく
雀龜此あやも春乃名跡
まに名残浦岬くも雲く
晦日如まや灯のり浦乃山

夜之記

伊勢の神宮に訪る世竹里堂
抄る

四月

真丸と神馬乃肥る 四月うさ

下玩訪

卯月
更秋

湖色なり卯月 卯月も三乃月
あふくをハ父のまの若人衣く
涙の爲く人を神らぬ衣く
きくく神乃あつくと神人更に

老慵

更秋人のうきにやちきぬ

屋敷の湯をりさう山は

権り人乃孫孫よて菱の上

内室くむ久堂とつさ

いづ

謹佛 道くくく佛をく佛を孫ひる

牡丹 とくくと牡丹はくくは乃内

芍薬 五六代芍薬つくく山家く

麦秋 関山乃香も若くき麦秋

杜若 子つとくくく植も田の橋

芥子 神もれく月ひ狭ぬく

白牡丹 白牡丹は影屋もく位指く

あくく色く又咲あつりけ

白牡丹 白牡丹は若くも動き

けくは若くも動き

けく乃苞もくく

柱五亭

卯花

若葉

松ヶけやまももさあうとみ子の花
卯のまは枝車とてかり垣根う布
これ花もあつて垣の中男くお
遊さうやいつまで遊さうとみま
古塩敷

内陸舟と仰り柳乃ワウ花おが
柿核の壁まもつりりりえくお
鷺湖

美早ふして不二もさうき沓坊の湖

夏木立

築代戸以朝くあめのワウ花おが
世義寺子坊ふ

松風の吹まつても夏木立
伊勢のふりり柳く孔鼻

ニウと坊ふ

茂

玉位やまふかうのま夏木立
うううううううううううう

若柳

若柳の面やあこのる遊り

青嵐

遊動くまてハ舟りま河

五ノ花五

長谷川
五七

初松魚
時の洞より日枝ら出たり青嵐
をりるを石川をまきく根原きん

竹の子
竹の子や子付をて寺の門
筍やまきく四五尺も草のあ

眠しきふ竹の子をりし出より
くけのふたし

子規

おのまほゆを女松けりき
まのりもまきくゆをきき
おのまほゆを女松けりき

金屏竹梅をきりて
海髪深き磯やゆわの石女師

三輪のあはれをよみて

杜宇ねらるるも山乃夏

鶯喜訪たり夜

糸よりさよ子親き青乃松

木多川

川、母やあはれ本よりわきし
ほりきすほや木明乃の池

三輪
五七

野千山より岩を三ツもあきし時
飯田至款を記

十日ありく又七一夕 不ぬ陣
陽空ニシテ此處佛乃くし海不
岩屋あり大なるお不動さまを彫
つけより内もくくくくくくくく
夕らまきくくくくくくくくくく
ゆきくくくくくくくくくくくく
なくまきくくくくくくくくくく

甲斐の可郡里のゆきとくくくく
くくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

表子やおか——猿孫れくくくく
ききくくくくくくくくくくく
一軒のねをやりゆきくくくく
幸い又まお娘——

痛くくくくくくくくくくく
四月十日大久保の地小園中乃

長門

長門

上巻
下巻

ろきき
一々
書

風哉
一
一
一
一

閑古香

身ゆ
閑古香

閑古香
閑古香
閑古香

閑古香
閑古香
閑古香

庭浦亭

夕月
閑古香

銭子蕉雨

望みは夜々もやあつと寝てゆく雨を
雨古くもあまき淋しさを我に問へ
秋をりや醉人の是も物りさし
ゆんまんと寝をりたり故の夕
連日は雨のちかちかすて色せ
解むらゝや在のあけ 秋懐のふ
あつとあつと故金ハ萌黄唯まの
こころぬをよこすつははゆきはゆ

秋

故懐

短夜

源とてくま身法師名芸門位別
説訪の人俳諧より世ひくす
松祀園小言とくをわを心か
やれとくまこころでまもこころ
つまらぬ短夜も萌黄小月夜哉
こころ夜や冥屋のゆるきまはあ
短夜乃月もいさよふまよきか
短夜も月あきハよを明もあ
こころ夜の月ふ驚く橋探るす

五月

夕雨より打つてくる。五月可郡
雨の如く君其の如く来る五月ふ
中りくは五月を過ぎし古鳥衣

日比栞原乃温泉よりありたり

寺の古塔午なりとて硯水や

菰稜をまきくともりて山川より

おろろろと湯入乃人乃もてた

さうくくを籠へて身を舞へるを

葛浦

白比知やあを免うくとて髪をきり

幟

幟りや言り松乃川流干

糶

此處やまうとてはま糶

言種一にいくとも記く糶くは

見くえり乃新小玉ちふ競馬の

竹藤

竹枝くまうくもあまうり苔此を

竹枝。日も人乃来て抱ひあお

人り来て植くことなり竹の落

心ありやういしあ竹とてあの人

伊勢方吉と素の孝后と抱く

田植

田と栲の人もううぬいさけうハ
うえて古の山田を席れ通うる家
ぬる星の敷を田植れ音一
委むくくくく栲の家の水田が
五月雨 五月雨乃伊勢二流分き夕

萱草屋

うきなきうや先は屋根垢を馬の

粟子の敷

ひりりり川澄れあきよ五月雨

栲藁塚

一一くれもや五月れあ乃中

五月雨や軒より落るあや草

ふりりあや雨の降るあや草

五月雨や苔屋を雲に之間う

乙卯五月廿二日於五老峯曾良

居士追福

五月雨や乞食止ても草ま

さくくく南にれあきよ五月雨

北の巻

老翁

うひまをくくしよるまはも翁まき
翁はこゝれ吹くまゝまゝくん

吹あ〜〜〜

〜〜〜

百合

ゆり花の衣とて白き山崎
ゆり花の衣とて白き山崎

長中崎

あちまのいねれ、伊賀れ境に
あちまのいねれ、伊賀れ境に

夜盆子

ねんぼし ねんぼし ねんぼし

橘

善竹

あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子

松

善田

螢

あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子
あまの蜜の三ははのきを花相子

浪良瀬

水難

雨もまじく曇も赤やも積乃上
 岸止は水難く交りりし海空
 艸花よりよき形も鳴水難
 きまはらけり字もあはれ門
 古井北里西と風も亭
 あり向人水難は小田といふ
 龍門
 致とも推ともあやも水難く

灯消る水難くきよと水ぬいと夜
 仿至て

水難きけとみちをり仿もあやき
 却る雨とらけり水難く
 梅花園夜會

西風や水難く夜と淡北あり
 長谷の響園亭夜雨

水難くよき形もあはれ門
 伊勢のまじりきよと水ぬいと夜

船中

五三

粘

歩り粘るふむて居やく兼が

狐川はくくくを過る

竿らんや粘のつちあまの氷れ限

却るれまを粘舟にゆくと

兼治くくくを粘れゆくと

併れもなくとくを粘舟な

金花山の紫く

粘れくくくを粘くくくを粘のゆと

あうきや粘舟に残る煙く那

粘

麻の子

粘れ背子粘りたれや 田村川
小倉山鹿のまやくくくを粘乃くけ

ちくくくを粘のま、粘れまふ

照射

粘れくくくを照射やまけん粘れ鳥

粘る角と粘るくくくを粘りく

信濃の若人き亭

照射くくくを粘はくくくを粘漁舟

暑

大城に暑をぬりあつさく

あつさくや小倉に粘りぬく

夕きりやとせあつちとるるのあ

西より黒のつらつらき

吾國れしとらち伯母のわ

解といぬへ中々とのまゝあ

かたよひは

西乞 西乞や伊ふきしやまの

夕乞 夕乞や黒の指すき

白るよきし 男はまはひ

夕乞や伊ふきしやまの

上三

團扇
夏月

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

夕乞や伊ふきしやまの

上三

清洲も程までいふもあつた月

餞業居

去年乃交列も一人に
比えつゝもさうさうと既
りも人ともさうさうと
相人人や水は月流のい
らるるりもさうさうと
悲しつゝもさうさうと
手さうさうと

あつた月と水もさうさうと
夏もさうさうと
西上人はさうさうと
さうさうと

さうさうと
人はさうさうと
さうさうと

さうさうと

夏地

うし馬り一多ゆきるふ地

夏葉

夏葉や一際ありく河系松

夏煙

夏ふく出る松煙、まくと木履の

撰子

荊藤つむくこと夏ありあつ煙

撰子

夏ふくこれ夏とれくく河系

柳原くくり長くわくか河

河路曲く水多し人語と奪て

つりくく夏ふく相する岩根

ま

蓮

撰子息吹くけな雨間く柳

夏福つり方のさきよ蓮乃夏

蓮花秀やかふし佛如あつくしそ

素書に不言や蓮ハ痴人と照るく玉

あけけりき音空雨の蓮可南

誰か妻を船こきりき蓮の中

一句并二句

蓮の考や人もあつりく夏若老庭

館くあわく蓮の志何まりく夏若

茨

瀬戸山子あかきや三時よてか
して帰る路より雷聲平
驟雨乃ちちりちり落き山川の
みずあはれをせせりゆく先の
川く只こゝ落おちりわづら
して矢田川をりり夕陽
らりちり照るして中野
菖蒲こゝり

もつれ花もや胡蝶乃いりり除

藻

昔は元

浮藻ひけハ池一もちれうこまて
映る心もやあつし心を昔のま
昔はぬまやあもらぬ花さきぬ
月けりもまづうまぬ昔乃花
こちのつ花はまてふらあし言ふ
枝子ねふ小鳥のうけやる乃花
古まむしれあきか
るく

其原やあつしはてて昔のま

夕顔

夕顔やまゝに咲けるも老若杖

一白井夕顔身

夕顔やたゞしくも花の友

不化かたふ日や夕顔月一ニ輪

夕顔や花をまゝは五月のものも

ゆふのはの蒼なくも夕可和

ひふふや梅待水けりもあけり

横須賀常柳もやそ

咲る玉豊とさ梅うり

蝉

夕顔の房にありても浪まじ

軽水口へけは塚なく木けけを

壁よまきてるけハあけ蝉の夢

菴乃香芙蓉の花よさ色たり

得鏡一字

悔ちくも影を影をさくも

夕顔してそや花高杖くを

色のをとほやふこけ小盃

才よきわの音をさるおては梅

秋迫
夕枝

晴
茶
風
園
誦

晴
茶
風
園
誦

愛 知 県



1103284270

